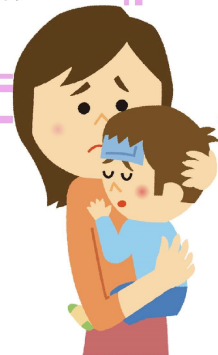




“たましい”の行く末



坊やお父さんはくり返し言われました。「こんなことなら、自分
がもっと遊んでやればよかったのに…」と。「三年保育のはじめの頃
なんて、柱にしがみついて嫌がっとなるのに、無理矢理スクールバスに
乗せたりしたんですよ。保育園に行っとなるわずかの時間も、今
から思えば ともにしてやれなかったのが悔まれます。」

そうなんです。先立たれてみると誰しも、「ああもしてやりたかった、こうもして
あげたかった」の想いがこみあげてきますよね。筆者とて同じ。早くに逝った父を想う
につけ、当時の自分の無力と、かえって逝く人のほうが遺る者たちに“済まん、済まん”
と言い続けられた姿を思い浮かべるのです。

『臨床仏教学のすすめ』大村英昭 著 より

身近な方を見送るのはつらい体験です。それが大切な方であるほど、生きている間にして
あげられなかったことへの後悔の念が押し寄せてきます。そんな時は、**亡き方の「たましい」
の行く末を真剣に考えてみる**ことが大切であると、大村英昭師（元筑紫女学園大学学長）
は言われます。手がかりとなるのは、宗祖をはじめとする先達のことばです。

（仏教では、実体としての「魂」は否定します。しかしここでは、
「亡き方のたましい」＝「**遺された者にとっての、亡き方の
かけがえのなき**」として語られています。）

亡き方はいったいどこへ行ったのか、いつか再び会うことはできるのか…？ 親鸞聖人の
「**かならずひとつところへまゐりあふべく候（必ず“浄土”という一つところに、私たちが
また、参ることでしょう）**」<親鸞聖人御消息>という言葉が響いてきます。

かけがえのない人の「たましい」の行く末を、“あい済まん”の気持ちで案じたことの
ない人たちには、なるほど「お浄土」なんて、ただの絵空事。どう説明したところで弱き
者らの幻影に過ぎないということになるのでしょうか。…

亡き人に対して“あい済まん”の思いを募らせるほどに、…特にいつ頃からとは申しませ
んが、**かけがえのない人の「たましい」の行く末を本当の意味で案じる限り、僕
自身もまたそこへ行くしかない**“そこ”のところがほのかにわかるようになりました。

亡き親を、亡き子を、亡きつれあいを想うとき、「浄土に往きたい」ではなく、「**私も同じと
ころに往くしかない**」といただく。そのような人々の想いが積み重なって、お念仏は受け
継がれてきたのではないかと、思います。大きな悲しみの中にも、心の落ち着き先がある
のがお念仏の救いです。

